ドイツ森の幼稚園、その後
― 理論、実践、実証、評価 ―

百合草　禎二
（富士常葉大学保育学部）

« はじめに »「森の幼稚園」という名称は、日本において確実にその地歩を固めている。日本で話題になったのは、1999 年に日本経済新聞に掲載された記事（「すくすく森の幼稚園」4 月 25 日）でなかったか。そして「森の幼稚園」の教育学的意義について、最初に注目し、現地へと足を運び、その意義を論じたのは、恐らく大場幸夫（2002.7.28）でないかと思う。筆者は、大場先生に触発され、またドイツにおける Hans-Georg Schede(2000),Ingrid Miklitz(2001).Kirsten Bickel(2001) らの研究を参考に、「ドイツの『森の幼稚園』の実践と子どもの発達 ― 森の中で育つ子ども ―」(百合草 2002) の論考を発表した。その後、日本では「ドイツ森の幼稚園」についての言及が確実に増え、その内容も「森の幼稚園」が子どもに与える影響を「アフォーダンスの観点」（中坪・久原・中西・境・山元・林・松本・日切・落合 2011）、「幼児と自然との相互作用」（中西・中坪・境 2010）など多数に上がった。また東方真理子（2004,2004,2005）、佐藤史浩・磯部裕子（2010）らによって現地での視察や参与観察を通しての考察がなされた。とくに 2009 年前後から広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設では実践的な検討を積極的に行っている。

« 定　義 »「森の幼稚園」の名称を巡って、「もりのようちえん」とする運動も活発である。なぜひらがなかと言えば、「森」や「幼稚園」に拘らず、子育て環境全般を議論するというスタンスをとっているからであろう。そのスタンスは納得できるとしても、しかし「森の幼稚園」の実践の教育学的・心理学的意義が曖昧になってしまう可能性がある。とするなら、あえて「もりのようちえん」と呼称する必要はなかったのではないか。やはり対象規定として「森の幼稚園」の実践とその教育学的・心理学的な意義は何なのかを明確にしておく必要があるのではないかと考える。少なくともドイツにおける「森の幼稚園」は、副題にあるように「ドアと壁のない幼稚園 ohne Türe und Wände」である。かつて日本にあった「家なき幼稚園」（橋詰良吉）の実践的願望とも通じる「ドアと壁のない」というスローガンに込められた理念が、通例の幼稚園と異なる所でないだろうか。

« 嚆　矢 »「森の幼稚園」の嚆矢として、1954 年頃の *Ella Flatau* によってデンマークで始められた両親指導の実践や 1968 年に *Corinna Sube* によってドイツに開設された最初の「森の幼稚園」（Wiesbaden）を挙げるべきであろうが、意識的に「自然教育学」を志向し、公的に認可された「森の幼稚園」を開設した人物として、*Kestin Jebsen und Petra Jäger* の二人の若い教師を挙げねばならない（Gründung des Waldkindergarten Frensburg）。彼らは、日頃、幼児教育のあり方に懐疑し、新しい実践のあり方を模索している中で出会ったデンマークの報告（”Spielen und Lernen”,1991.4）に共感し、現地で実践に触れ、帰国し、開設した。その「フレンスブルク森の幼稚園」（Waldkindergarten Frensburg e.V,Schleswig-Holstein）こそが、「ドイツ森の幼稚園」の最初である。

« 園　数 »「フレンスブルク森の幼稚園」は、1991 年に開設され、認可されたのが 1993 年であるが、ドイツにおいて「森の幼稚園」と形容された園は、2001 年には 394 カ所、2009 年には 599 カ所に、今年 2012 年には約 531 ヶ園である（参照：Liste der bekannten Waldkinderguarten&Waldkindergarten ）。しかし「自然―森の幼稚園連盟」によると 1000 以上あるとのことである。

« 理　念 »「ドイツ森の幼稚園」の理念とは何か？各々の「森の幼稚園 HP」に掲げられたスローガンにこそ、その理念の一端を窺うことができるであろう。「子ども達に自然を与えよ、彼らは自らのファンタジーを利用する」（Waldkindergarten Frensburg e.V）や「おもちゃは壊れる、体験は永遠である」（Waldkindergarten Augusburg e.V）などに表現されているように、「子ども時代を楽しむためのもっとも美しい場所は、おそらく自然だろう。私たちは、子どもが、自然に近い、全体的な発達を可能とさせたい。＜ドアと壁のない＞空間としての森は、全ての子どもに自由に、運動し、笑い、泣き、踊り、夢見る、言葉の本当の意味で＜子どもの存在＞の為の充分な場所を提供する」（Waldkindergarten Jena e.V）と述べられている。

« 実　践 »「ドイツ森の幼稚園」には少なくとも三つのパタンがある。一つは、典型的で古典的な園、二つには、統合的な園であり、三つ目は、ヴァリアントなプロジェクト型の園である（*Ingrid Miklitz* 2001）。そこにはヴァラエティに富んだ運営の方法があり、一概に言えないが、少なくとも「ドイツ森の幼稚園」というには、一年中（四季を通して）、平日、数時間、天候の如何に関わらず（もちろん一定の条件の下で）、自然の中に抱かれて、全感覚を使い、アニミズムに夢見ながら、イマジネーション逞しく、時には一人で、時には協同で活動する。絵を描くことも、音楽を奏でることも、踊りを踊ることも、ゲームに興じることもある。静かに自然の音に耳を傾け、畏敬の念を抱く。文明的な環境としての教室という通例の幼稚園では叶えられない光景であろう。

« 実　証 » 実証的な研究は、まだ十分であるとは言えない。その中でも *Peter Häfner*（2002）のハイデルベルク大学に提出した学位論文は説得的であるように見える。通例の幼稚園と「森の幼稚園」の卒園生の小学校入学後の違いを＜動機―意志の領域＞＜社会的領域＞＜認知の領域＞＜身体の領域＞＜個々の分野＞＜一般的な質問＞の六つの領域について小学校の担任にアンケート（六段階評価）するという方法で明らかにしたものである。また *Kirsten Bickel*(2001) は、保護者に「森の幼稚園」になぜ入れたのか等の 6 項目のアンケートを実施している。

« 課　題 »「森の幼稚園」の実践をどう評価するのか、あるいはその実践から何を学ぶのか？ということである。時として、実証研究は、自然あるいは自然体験が、どう子どもに影響を与えるのかという至極当たり前の視点での議論がなされる。一方に変わらないものとしての独立変数としての「自然」を置き、対極に可変的な従属変数としての子どもを置き、その変化を見るという研究は、人工的な文明的装置よりは、「生きた自然」であることから増しであるとするだけで、この種の議論には実りは少ないだろう。逆に、変革主体として、自然に働きかけ、それを変えると同時に、自らも変わるという＜発展的活動研究＞とでも名づけるべき新しい研究が重要となろう。また、この実践から学ぶことがあるとしたら、「恩物」や「感覚教具」のような「手の工業化」（杉山明博）でなく、美としての自然造形の「自然恩物」との出会いによる創造性の意義でなかろうか。また最も重要な視点は、プリゴジンが指摘する 21 世紀の科学、つまり「不確実性の科学」の認識的基礎であり、その意味する所は「安定・秩序・均質・平衡・可逆性」から「無秩序・不安定性・多様性・非平衡・不可逆性」への科学的認識の転換ではないだろうか。